

異世界 子育てしながら冒険者します

ゆるり紀行

4

Minazuki Shizuru
水無月静琉

ポルト

タクミの契約獣となったサンダーホーク。

シルフィール

タクミを異世界に転生させた風の神様。

ベクトル

火神からタクミのもとに送られたスカーレットキングレオ。

フイート

タクミの契約獣となった飛天虎。小型にもなれる。

ジュール

タクミの契約獣となったフェンリル。小型にもなれる。

登場人物

CHARACTER

グランヴァルト

ガデア国騎士団所属で、アイザックの上役。

アイザックリスナー

博識で冷静なガデア国の騎士。兄セドリックはリスナー領の領主。

タクミ・カヤノ

異世界に風神の眷属として転生した本作の主人公。アレンとエレナの保護者。

エレナ

水神の子で、兄・アレンとともにタクミに保護された少女。格闘術が得意。

アレン

水神の子で、タクミに保護された少年。格闘術が得意。

第一章 旅の準備をしよう。

「よおー、タクミー！」

「お久しぶりです。一ヶ月半ぶりですね、タクミさん」

「えええええ!？」

僕、茅野^{かや}巧^{たくみ}は、エーテルディアという世界の神様の一人である風神シルフィールの力で、彼の眷属^{けんぞく}として転生した元日本人だ。

その世界で水神の子であるアレンとエレナと出会い、冒険者として一緒に暮らしている。

ここ最近、ガディア国にあるベイリーの街の近くで、僕が見つけた迷宮——「細波^{さいなみ}の迷宮」という地下三十階層から構成される水属性中級のダンジョンを攻略していた。

今日攻略を終えて、お世話になっている領主様のお邸^{やしき}、リスナー邸^{てい}に戻ってきたんだけど……そのまま応接室に通されて意外な人物と再会し、思わず声を上げてしまった。

そこにはなんと！ 僕がこの世界に来て初めて訪れた街、シーリンで出会った騎士のグランヴァルト・ルーウエン様と、アイザック・リスナーさんがいたのだ。

「ちびっ子達も元気だったかー」

「アレンくん、エレナさん、こんにちは。お元気でしたか？」

「げんきー」

驚く僕をよそに、ヴァルト様とアイザックさんはアレンとエレナに声を掛け、子供達もそこそこの面識のある人だったためか、普通に返事をしていた。

「いやいやいやっ!! な、何でヴァルト様とアイザックさんがここにいらっしゃるんですう!？」

「酷いですね、タクミさん。ここは私の実家ですよ。いてもおかしくはないでしょう?」

「い、いや……それはそうですけど……」

確かにベイリーの街を含むこの一帯は、アイザックさんのお兄さんであるセドリック・リスナーさんが領主を務める土地だ。すなわち、アイザックさんの実家でもある。

だから、彼がここにおいてもおかしくはない。おかしくはないのだが……。

もしかして休暇だろうか? でも、それならヴァルト様が一緒にいるのはおかしい、よな?

そもそも、セドリックさんは二人が来ることを知っていたのだろうか?

「タクミさんをここまで驚かすことができたのなら、馬を早駆けさせて強行軍で来たかいたがりましたね」

「そうだな。いつもはタクミに驚かされているばかりだからな」

「……」

アイザックさんもヴァルト様も、満足そうに頷いている。

どうやら、彼らはシーリンの街からこの街までかなりのハイペースで来たようだ。

そうだな。でなければ、日数的に考えて彼らがこの街にいるのはおかしい。何せ、十日ほど前にはベイリーとシーリン間でリスナー兄弟が手紙のやりとりをしていたのだから。

一般人なら馬車を乗り継いでひと月はかかる。騎馬で休憩をほぼ挟まず飛ばしっぱなしで来たとしても、こんなに短期間で到着するなんて、相当優秀な馬で乗り手の技術も高いことだろう。

それはいいとしても、僕が驚いたことにここまで嬉しそうにされると、なんか……悔しい……。

彼らがいっつ到着したのは僕にはわからないが、もし着いたばかりで疲れているのだとしても、

疲労^{ねむ}が気持ち失せてしまう。

「で、本当になぜここに?」

とりあえず、僕はヴァルト様とアイザックさんがここにいる理由をもう一度尋ねた。

二人揃ってリスナー邸^{いで}に来たのが、単なる里帰りだなんてやっぱり思えないからな。

「タクミを迎えにだな!」

「はあ!？」

ヴァルト様から意味がわからない言葉が返ってきた。

僕を迎えに? 何だそれは?

「隊長、説明を省くのは止めてください」

溜め息をつくアイザックさんに向かい、改めて聞いてみる。

「……えっと、アイザックさん、どういうことでしょうか？ あ！ あと、すみません。アイザックさんのお名前、勝手に呼ばせていただいています」

以前は『リスナー様』と呼んでいたけど、お兄さんのセドリックさんと紛らわしいので変えさせてもらった。

「ああ、名前は問題ありません。リスナーの家に滞在していて、『リスナー』と呼び続けるのは不便ですからね。むしろ、敬称も必要ないのでアイザックと呼んでくださって構いませんよ」
笑顔で許可をもらい、一安心した。

アイザックさんなら怒りはしないだろうとわかっていても、断りを入れずに貴族の人の名前を馴れ馴れしく呼ぶのには多少の抵抗があったからな。

「おう、俺のことも呼び捨てで構わないぞ！」

「いや……それはちょっと……」

ついとばかりに、ヴァルト様も話に乗ってかかってきた……。

セドリックさんと同じやりとりをしたけど、やはり敬称なしで呼ぶのは無理です。

あと、ヴァルト様は『ヴァルト様』のままのほうがしっくりくるんだよねあ。

「それで、迎えというのはどういう意味なんですか？」

僕は話を本筋に戻して、アイザックさんに説明を求めた。

「この度、私達は異動で王都勤務になりました」

「そうなんですか？」

へえ、こんな時期に配置換えするんだ。

でも、どうして二人の王都への異動が僕の迎えに繋がるんだろうか？

「ええ、もともと予定していた異動なのですが、少々早まりましたね」

「……えっと？」

「何でも、ベイリーで新しく迷宮を発見した方がいて、陛下がお会いしてみたいそうなんです。ですが、その方は目立つことを嫌うようでした。陛下からの召喚状が発行されれば、政府の中核どころか、城中から否応なく注目が集まりますからね。その方に不本意な事態は、陛下としてもできれば避けたいそうです」

「……」

ヴァルト様とアイザックさんの異動について……かと思ったら、なんだか話の方向が変わってきた。

しかも陛下下って……王様のことだよな？ え？ 僕達、王様に呼ばれたってこと？

「それで、迷宮を発見した方と知り合いである私達が命令を受けたんです。その方をお願いして王都に来てもらってくれ、と。ついでに護衛を兼ねて一緒に王都へ移動すれば一石二鳥ではないか、とも仰っていましたね。いや、タクミさんがベイリーを出入りする前に我々が到着できてよかった

です」

「……」

もう、何がなんだか……。

えっと……王都行きはあくまで僕達の意思次第のはずだけど、これはもう半分強制されている感じだよな？

まあ、王都にはいずれ行く予定だったので、行くこと自体は構わない。構わないんだけど……王様に会うことにもなるってわけだね。

うーん、王様に会ってみて人柄を確認しておくのも悪くないか？ 何となく、今後のためにもそのほうが良いような気がするし。

「アレン、エレナ。別の街に行くことになるけど……いいかい？」

「んにゅ？ おにーちゃんもいっしょー？」

「一緒に行くよ」

「じゃあ、アレンもいくー」

「エレナもいくー」

一応、二人にも王都行きについて聞いてみると、問題なく承諾してくれた。

じゃあ、ヴァルト様とアイザックさんとともに王都に行くことにしようか。

「えっと、出発はいつになりますか？」

「いいのですか？」

「ええ、王都にはいずれ行く予定でしたからね。まあ、だからといって『明日、出発』なんて言われたらさすがに無理ですけど」

王都に行くまでの食料や諸々の日用品は《無限収納》インベントリの中に揃そろっているが、それでもやはり旅の準備をする時間くらいは欲しい。ベイリーでしか手に入らないものがまだあるかもしれないし、そこまで疲れなかったものの、迷宮を攻略したばかりでひと息つきたいからな。

「我々もベイリーに到着したばかりで休息は必要ですので、その心配はいりませんよ」

あ、やっぱりヴァルト様とアイザックさんは、ベイリーに着いて間もないみたいだな。そうなるど、すぐに出発とはならないだろうから、数日くらいは時間があるかな？

「そうですね。じゃあ、正式な出発日が決まったら教えてください」

「はい。——ところで、タクミさんは馬には乗れるのでしょうか？」

「あー……すみません、乗れないですね」

そうか。ヴァルト様やアイザックさん達と一緒にすることは、僕の契約獣であるフェンリルのジュールや、飛ひ天虎てんこのフィートに乗って移動することはできないのか……。

さて、そうなるか……どうするかなあ。ジュールやフィートの場合は、僕達の乗り心地や安全を考慮して彼ら自身が調整してくれるから問題なく乗れるが、さすがに自分で馬の手綱たづなを操る自信はない。

普通であれば、何度か練習すればそれに関係するスキルを習得できるのに、ジュール達は乗り心地がよすぎるせい、何のスキルも覚えられなかったんだよね。

ん〜、いつそのことジュール達の存在をバラしてしまうか……。もしかしたら二人はセドリックさんからジュール達のことを聞いているかもしれないしな。

でも、セドリックさんはジュールとフィートをフェンリルや飛天虎の子供だって認識しているはずだから、あの子達に乗って移動しているとは思ってないか？ 普通はSランクの魔物に乗るなんて考えないだろうし。

「何だ？ タクミは馬に乗れないのか？ それなら俺が教えてやろうか？」

ジュール達についてどうするべきか悩んでいると、ヴァルト様からそんな提案をされた。なるほど。乗馬の練習をするっていう手もあったな。

早駆けまでは無理でも、【騎乗】スキルを手に入れて普通に乗りこなすことくらいは、シルに創ってもらった今の僕の身体ならすぐにできるかもしれない。

「ヴァルト様、乗馬の指導をお願いしてもいいですか？」

「おお、いいぞ。任せておけ」

もしスキルを習得できなかったとしても、この機会に乗馬の経験をしておいて損はないだろう。

今後、場合によってはジュール達を呼び出せないこともあり得るからな。

「でも、馬を乗りこなせるようになるかはわからないので、移動手段を今確定することはできない

んですが……」

「ええ、大丈夫ですよ。まだ出発日は決まっていませんし、結果的に馬車が必要になったとしても我が家のものを使えばいいのですから」

僕が馬に乗れるようになった場合でも、アレンとエレナと一緒に乗せられるか、という問題もある。

ただ、さすがに三人で一頭の馬に乗るのは無理だろう。そうなると、ある程度懐いているヴァルト様やアイザックさんに、アレンかエレナのどちらか一人をお願いするとか？

まあ、それは僕が馬に乗れるようになってから考えるのも遅くないな。

とにかく、まずは訓練しなくては。

「叔父上！。入りますよー？」

王都行きが決定し、乗馬の練習も決まったちようどその時、セドリックさんの息子であるテオドールさんとラティスくんが部屋に入ってきた。

「タクミさん、アレンくん、エレナちゃん、お帰りなさい」

「お帰りなさい」

「テオドールくん、ラティスくん、ただいま」

「ただいまー」

部屋に入って来た二人は、僕達を見つけて駆け寄ってくる。

「迷宮はどうでしたか？」

「お話を聞かせてください！」

テオドルクさんとラティスくんは、迷宮での出来事に興味津々のようだ。

「迷宮の話は時間がある時にね。それよりも、アイザックさんに用事があったんじゃないのかい？」

「違いますよ。僕はタクミさん達がこの部屋にいて聞いていたので来たんです」

アイザックさんに呼びかけて部屋に入ってきたから、てっきり用事があるのかと思ったけれど、彼らの目的は僕達だったらしい。

「それにしても、よく僕達がここにいることがわかったね」

「それはですね、タクミさん達が帰ってきたら、すぐに僕達にも知らせるよう使用人に伝えておいたからです！」

おう……。この子達、セドリックさんと同じことをしている……。

セドリックさんは街門の兵に頼んで、僕達がこの街に到着したことを知らせてもらっていた。

街と自分の邸やしきとで規模は違うが、やっていることは間違いなく同じだ。さすが血の繋つながった親子だな。

「おやおや、血は争えませぬね。この子達、兄と同じことをしていますよ」

アイザックさんも、セドリックさんがやったことを知っているらしい。呆れたように甥おい達を見ていた。

そんな態度をとっているけど、僕にはアイザックさんも同じことをしそうに思える……。

「……アイザックもよくやるだろう」

不意に、ヴァルト様がぼつりと小さく呟いた。

案の定、アイザックさんも常習犯なのか。

「テオドルクもラティスも、今は勉強の時間なのではないですか？」

アイザックさんは誤魔化ごまかすように咳払いをし、甥おいつ子達に話し掛けた。

「ちょうど終わったところです！」

「僕もです」

ああ、やることが済んだから迷宮での話を強請ねだりにきたってわけか。二人とも冒険の話が好きだつて言っていたもんな。

そうだな。話をするのもいいけど――

「じゃあ、迷宮で面白いものが手に入ったから、それで遊ばない？」

「本当ですか！」

「やったー」

「どこか広い場所がいんだけど……」

遊びの内容を考えると、さすがにこの応接室では狭すぎる。

すると、テオドルクくんは目を輝かせたまま僕の手を取った。

「訓練場に行きましょう！ タクミさん、早く早く！」

「アレンくん、エレナちゃんも早く！」

ラティスくんもアレンとエレナの手を取ると、テオドールくんとともに足早に応接室を出ようとする。

「わっ！ 二人ともそんなに慌てないで……」

僕はテオドールくんとラティスくんに急かされて訓練場へとやって来た。

数人の騎士がいたので邪魔にならなそうな一角に行き、僕はバブルアーケロンから回収したバスケットボールほどのシャボン玉を取り出す。

「うわ！ 何ですかこれ！」

「柔らかい〜」

『細波の迷宮』で遭遇した亀の魔物であるバブルアーケロンは、敵が現れるとシャボン玉を吐き出して動きを妨害し、その間に逃げるという習性を持つ。

そのシャボン玉はしばらく経つと自然と消滅するし、バブルアーケロンを倒した場合はその瞬間に消える。

だがしかし、僕が『無限収納』に入れておいたシャボン玉は消滅せずに残ったままだった。しかも、何をしても割れない。試しにナイフを突き刺してみたが、それでも割れなかった。

なので僕は、頑丈だけど柔らかくて軽いゴム風船のようなそれを見た瞬間、子供達の遊び道具にぴったりだと思ったのだ。

「それをこっちに向かって、手で軽く打って飛ばしてごらん」

「どうですか？ ——それ！」

テオドールくんがシャボン風船をぽんと打つと——ぽよんっ、と風船が浮き、こちらに向かってゆっくりと飛んでくる。

「アレン。そのままラティスくんのほうに向かって打って。軽くだよ」

「はい」

飛んでくる風船を僕の隣にいるアレンが打つと、今度はラティスくんのほうへ飛んでいく。

「ラティスくん、次はエレナのほうに打って」

「はい！ ——それ！」

「上手！ エレナ、今度はテオドールくんのほうね」

「はい」

「一巡すれば子供達は遊び方を完全に理解し、次々と風船を打ち飛ばしていく。何か面白そうなもので遊んでいるな。タクミ、あれは何だ？」

少し遅れて訓練場にやって来たヴァルト様が、子供達が遊ぶ風船——バブルアーケロンのシャボン玉に興味を示した。この世界には植物、魔物の不思議な素材はたくさんあるが、ゴム製品みたい

なものは広まっていないので珍しく感じるのだろう。

「あれはバブルアーケロンが出す泡？　ですわね」

ヴァルト様と一緒にやってきたアイザックさんは、冷静に分析した。一目で見抜くとはさすがだ。すると、ヴァルト様は目を見開いて声を上げる。

「はあ!?　ちよつと待て！　バブルアーケロンの泡って、触れると割れて弾けるアレか？　何で割れないんだよっ！」

「いや、バブルアーケロンを倒すのに邪魔だったんで《無限収納》に入れたんですけど、倒した後もそのまま残っていたんですよ。そして取り出した時には既にあんな感じでした。刃物で刺しても割れる気配がなかったので、遊びに使っても問題ないと思ひまして」

《無限収納》への収納は、対象に触れているように見えるけど、実際は触ってないみたいなんだよな。だから、泡が弾けることなく回収できた。

「っていうことは、バブルアーケロンを倒したのかよ。普通は逃げられるからなっ！」

「……タクミさんらしい倒し方ですね」

ヴァルト様とアイザックさんから呆れた目で見られた。

いやだって、視界を覆い尽くすシャボン玉を片付けるなら、《無限収納》に収納するのが一番早いしね。

「タクミ、まだその泡を持っているなら、ちよつと貸してくれ」

「あ、はい」

小さな片手で掴めるくらいのシャボン風船を一つ取り出してヴァルト様に手渡すと、彼は早速アイザックさんとともに検分するように弄りだした。

実は、バブルアーケロンのシャボン風船は小ささまざまな大きさがある。テニスボールくらいのものから、バスケットボールよりひと回り大きいくらいまで。

一匹のバブルアーケロンからは大体同じ大きさのシャボン玉が吐き出されるのだが、個体によって泡の大きさが違ったのだ。大きい泡を吐き出す個体、小さい泡を吐き出す個体、と。

なので、僕の手持ちのシャボン玉にはいろんなサイズが揃っている。

「……本当に割れねえーな」

ヴァルト様が驚掴みにしたシャボン風船に力を込め、割れないことに感心していた。

「隊長が力一杯掴んでも変形するだけとは……。かなりの耐久性ですね。素材として何かに使えると思いますので、研究者やギルドが食いつきそうです」

「だな。おい、タクミ。これは結構数があるのか？」

「まあ、そこそこありますね。バブルアーケロンと遭遇した時に、一度で吐き出す泡の量は大体わかりますか？　正確な数じゃなくて目安って意味で」

「ああ」

「あれを十数回分、回収したと言えば、何となく量はわかります？」

「……ああ。大量にあるってことだけはわかった」

バブルアーケロンに遭遇するたびに、泡を回収しちゃったからねえ。

時間が経てば消えるであろう泡を放置するならともかく、一度《無限収納》に回収して割れなくなったシャボン風船を迷宮内に投棄してくるわけにはいかなかったのだので、保管しておくしかなかったのだ。

「タクミさん、いくつか売ってもらってもいいですか？」

「いえ、差し上げますよ？」

僕が気軽にそう言うと、アイザックさんは首を振った。

「それは駄目です。研究目的でもありませんから。こういうのはしっかりとっておかないと、有用な使い道が見つかった場合、問題になりますからね。タクミさんが相手なら採めることはないと思いますが、だからといって決まりを崩すことは良くないですから」

なるほどな。素材の所有者をはつきりさせておかないと、将来的に利益で採め事が起こる可能性があるってわけか。

僕としては、あげる“時点”で所有者は相手に移るものだと思うんだが、屁理屈を言う人っているだろうしな。

「そういうことならわかりました。でも、売値はそちらにお任せしますよ？」

「ありがとうございます。とりあえず、ここでいくつかと、王都に行つてからも少し譲ってくださいると嬉しいですよ」

「量はありますからね。問題ないで——おっと」

その時、後ろから何かがぶつかる軽い衝撃があった。

「ん？ ああ、アレンとエレナか。どうかしたか？」

「いっしょに」

「あそぶー」

「タクミさん、これ、面白いです。叔父上ー。叔父上もどうですか？」

「ヴァルト様、勝負しましょう！」

四人で遊んでいた子供達が僕達を誘いに来たようだ。ラティスくんに至っては、ヴァルト様に勝負を挑んでいた。

「どうします？」

僕はヴァルト様とアイザックさんを窺い見た。

「おっし！ ちび共、相手をしてやる！」

「そうですね。普段は仕事で会えないわけですし、たまには子供達と遊びましょうかね」

初めは僕もアイザックさんも一緒に遊んでいたが、最終的には子供達四人対ヴァルト様という構図ができ上がり、ヴァルト様は日が暮れ始めるまで子供達の相手をしてくれたのだった。

その日の夕食はヴァルト様とアイザックさんも加わり、とても賑やかなものになった。

夕食の料理にはホタテはもちろんだが、見た目や名前が一緒のマテ貝や、サザエに似た形のヤール貝という貝のバターシヨウユ焼き、カレースパイスを利かせた魚のムニエル、マヨネーズを添えた野菜スティックなどがあった。

リスナー邸の料理人であるリヤンさんが試行錯誤を繰り返し、徐々に料理の幅を広げているのがわかるメニューだ。

その料理にヴァルト様とアイザックさんが、見たことも聞いたこともない料理だと驚いていた。

セドリックさんが既に手紙で知らせたものと思っていたが、自慢込みで伝えたのはゼリーまでだったらしい。なぜかといえば、迷宮発見の報を受けたヴァルト様達は、王都と連絡を取り合い、素早くシーリンを出発したからだ。

ということとは、やはりセドリックさんはヴァルト様とアイザックさんがここに来ることを知っていたのだろう。

「うめえー」

「とても美味しいですね」

二人は初めての料理を堪能していた。

そして、その後は大人達だけで一杯やろうという流れになった。

「おう、ちび共は大丈夫だったかー？」

「まあ、何とか……。少しぐずりましたけどね」

お酒を飲む場なので、ここにアレンとエレナはいない。二人には何とか納得してもらって、僕達が貸してもらっている部屋に寝かせてきたのだ。

一応、ジュール達を呼び出してアレンとエレナの側にいてもらっている。

「あいつらは基本、お前にべったりだからな」

「育った環境が環境ですから、仕方ないでしょう。でも、こうやって少しの間だけでも離れられるようになったのですから、良かったですよ」

アイザックさんの言う通りだ。アレンもエレナも、少しずつだがちゃんと成長していると思う。

二人は奴隷として売られそうになっていたのだから、酷い環境にいたはずなのだ。なのに、あの子達はとても純粋で素直に育ってくれている。それはとても喜ばしいことだ。

「育った環境、ですか？」

アイザックさんの言葉に、セドリックさんが不思議そうな表情をした。

さすがにアレンとエレナの身の上までは、セドリックさんに伝わっていないんだな。

「アレンとエレナは、もとは孤児としてかなり酷い環境にいたようなんです」

「そうだったんですか……。では、タクミさんと血が繋がっているわけではなかったのですね……」
セドリックさんは、心底驚いた、という感じであった。

この反応は、僕達が本当の家族に見えていたってことだろうか？ それなら嬉しいな！
すると、ヴァルト様が僕の思いを理解したかのように言う。

「血の繋がらなくて関係ないって言えるぐらいに、タクミ達は家族っぽいかな！」

「ヴァルト様、ありがとうございます。そう言ってもらえると嬉しいですよ」

「そうかそうか！ ほら、タクミ。普段はそんなに飲まないんだろ？ 今日は飲め飲め！」

「そうですね。あ、そうだ。これ、飲んでみませんか？」

僕は迷宮で汲んだブランデーを思い出し、瓶を数本取り出した。

リスナー邸に帰ってくる途中、通りすがりのお店で洒落た瓶を見つけたので、それを買ってブランデーを樽から移し替えておいたのだ。

「ん？ それは何だ？」

「タクミさん、これは？」

ヴァルト様もセドリックさんも、興味を惹かれたらしい。

「お酒です。たぶん、珍しいものだと思うんですが」

「何?!? 珍しい酒か！ 早速飲もうぜ」

ヴァルト様は表情を輝かせ、すぐさま瓶を手にとってグラスに注ぎだした。

アイザックさんもセドリックさんも、ブランデーの入ったグラスを覗き込む。

「綺麗な色ですね。色はエールに似ていますが…別物ですよ。香りが違います」

「そうですね。嗅いだことのない香りです」

「これはブランデーというお酒です」

僕がそう言うと、リスナー兄弟は二人揃って不思議そうな顔をする。

「聞いたことのないお酒ですね」

「ええ」

この反応を見る限り、やはりブランデーはこの世界で出回っているお酒ではないようだ。

セドリックさん、アイザックさん、そして自分のグラスにもブランデーを注ぎ、早速、四人で飲んでみた。

「うめえーな」

「そうですね、隊長」

「これは美味しいですね。それにかなり強めです」

三人の口には合っていたようで、わりと好評だ。

だけど、ブランデーはストレートだとやはりキツイ。水を用意しておけばよかったか。

「セドリックさんの言う通り、このままだと強いかもしれませんね。水で割ったり、氷を入れたりしてちびちび飲む感じのほうがいいかな？」

初めてブランデーを飲むなら知らないかもしれないので、水割りやオンザロックの飲み方も伝えしておく。

「俺はこのままでも充分だと思いが、それも美味そうだな」

「なるほど、氷で冷たくすると味わいが変わるのでしょね」

「そうですね。今、氷を用意させます」

そう言うと、セドリックさんはすぐに使用人を呼んで氷を頼んだ。

氷って、簡単に用意できるのか。この世界には冷蔵庫や冷凍庫の魔道具があるみたいだけど、かなり高額だったはずだ。まあ、仮にも領主邸だしな。きつと置いてあるんだろう。

あるいは氷室があるのかな？ それか、氷魔法が使える人に作ってもらうとか？

そうだな、僕も近いうちにジュールに氷を作ってもらって《無限収納》に保管しておこう。……ん？ いや、生活魔法の《フリーズ》で氷を凍らせればいいのか。それなら自分でも作れるし。

氷といえば、かき氷とかいいよな。あと、アイスクリームも作りたい。まだまだ暑いから、子供達のおやつにちょうどいいだろう。

あくでも、薄く氷を削る道具がないか。ナイフで削るのは根気が必要そうだから……道具を作ってもらわないといけない。

アイスクリームなら大丈夫かな？ 卵黄に砂糖、ミルクかクリームを混ぜて一度熱を通し、あとは凍らせながら混ぜる作業を続けられるはずだ。

そう考えると、冷やすものじゃないけど、アイスと似た材料のプリンもいけそう。蒸す時間やミルクの量の調整は必要だと思うが、そこらへんは何回か試作すれば納得するものが作れるだろう。

そんな風にあれこれ考えていると、ヴァルト様から声がかかる。

「タクミ、この酒はどこで手に入れたんだ？」

「ん？ ああ、細波の迷宮内に湧いていたんです」

別に隠す必要もないので、正直に答えると――

「「はあ？」」

三人の驚く声が重なって返ってきた。

「ちなみに、二十八階層ですね」

「「はああ!?」」

またも同時に驚きの声上がる。三人とも息ぴったりだ。

「ちょっと待て！ 二十八階層だって？ 確かあの迷宮は全部で三十階層だと聞いたが、もしかして……」

「ん？ 攻略なら終わりましたよ？ ボスはリトルクラーケンでした」

「「はああああー!?」」

うん、本当に息ぴったりだ。

「おいおいおい！ 新しく見つけたばかりの迷宮をもう攻略し終えたって言うのかよ！ しかも、リトルクラーケンだって？ それを倒したってーのか!?」

「まあ、そうですね」

ヴァルト様が呆れたような目で見てくる。

「はあ……」

「タクミさん……」

アイザックさんとセドリックさんは深く溜め息をついた。

何だろうね、この反応は……。酷くない？

「ところで、タクミさん。このお酒はまだありますか？」

「ん？ あ、はい。それなりの量を汲んできていますよ？」

セドリックさん、どうしてそんなことを聞くんだろう。どこかで売り出すつもりかな？

「では、王都へ行ったら陛下に献上してもらってもいいですか？」

「えっ!? 献上？ このお酒をですか？」

「ええ、充分な品だと思いますよ。今まで味わったことがない味ですしね。瓶は私が相応しいものを用意しておきます」

それは構わないが……あれ？ 今、セドリックさんは「献上してもらおう」って言ったか？

前にセドリックさんは、迷宮発見の一報は先に手紙を送っておいて、後日改めて領主である自分が王都へ行つて詳細を伝えるって言っていたような覚えがあるんだが……。行かないことになったのかな？

「セドリックさんも王都に行く予定ではありませんでしたか？」

「ああ、それはアイザックが名代で謁見することになりました」

「私も一応、リスナー家の者ですからね」

「一緒にタクミさんも謁見することになりますから、献上品はタクミさんからお渡ししたほうがいいでしょう」

あ、そういうことになっていたのか。確かに、アイザックさんが王都に行くなら謁見を任せてしまえばいいよね。

「そういうのは後でいいじゃねーか。今は飲もーぜ」

「まったく、隊長は……」

「まあ、アイザック。確かにルーウエン殿の言う通り、お酒の席で話すような話題ではないですし、謁見や献上の件は後日にしましょうか」

「……そうですね」

「ははは〜」

ヴァルト様らしい言い分によって今はお酒を楽しむことになり、打ち合わせ的なものは後日行うことになった。



立ち読みサンプル
はここまで

「じゃあ悪いけど、二人をお願いな」

《うん、わかったー》

《大丈夫。兄様、任せて〜》

『ジイ』

『がるっ』

フェンリルのジュールと私は念話で、サンダーホークのボルトとスカーレットキングレオのベクトルは鳴き声で、部屋を出て行く兄様に返事をする。

私はフィート。飛天虎^{ひてんこ}で、ジュールやボルト、ベクトルもみんな、タクミ兄様の契約獣。

今は兄様達三人に与えられた寝室に呼ばれて、大きなベッドの中央で小さく丸くなり、くっついて眠るアレンちゃんとエレナちゃんを見守っている。

「……………うにゅ〜」

《……………起きちゃった？》

《ううん、大丈夫みたい。ちゃんと寝ているよ》

私の問いかけに、ジュールは念話で答えてくれた。

兄様は、これからこの邸の主とシーリンから来た騎士達とお酒を飲んだって。

でね、お酒は子供の体によくないし、時間も遅くなるだろうからって、アレンちゃんとエレナちゃんはお留守番することになったの。

